第三講 演習問題 一・二・三

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。ただし、問いの都合で返り点・送りがなを省いた部分がある。

元世祖既立。廉希憲請遣使以息兵講好、命軍北帰、(1)俾恩威並著。世祖善之、而未得(a)其人。王文統素(2)忌郝経才徳。乃遣経行。或謂経曰、(b)盍以疾辞。経曰、自南北構難、江淮遺黎、弱者(3)被俘略、壮者死原野、兵連禍結、斯亦久矣。(c)聖上一視同仁、務通両国之好。(d)雖以微軀蹈不測之淵、(4)苟能弭兵靖乱、活百万生霊於鋒鏑之下、吾学為有用矣。遂行。

（『十八史略』）

（注）○元世祖―元の皇帝、フビライ。 ○廉希憲―人名。 ○講好―和睦する。 ○恩威―恩恵と威光。
○王文統―人名。 ○郝経―人名。 ○南北構難―南の宋（南宋）と北の元とが戦争をする。
○江淮―揚子江と淮河。ここではこれらの川の流域一帯のこと。 ○遺黎―敵の側にとり残された人臣。

○俘略―捕らえ略奪すること。　○微軀―いやしい身。自分をへりくだっていう。　○弭兵―戦いをやめる。
○生霊―人民。　○鋒鏑―ほこさきとやじり。ここでは戦争のこと。

問一　波線部(1)～(4)の送りがなを含めた読み方として最もふさわしいものを、次のア～エの中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

(1)　俾
ア　しめんことを　　イ　られんことを　　ウ　ざらんことを　　エ　れんことを

(2)　素
ア　まさに　　イ　また　　ウ　もとより　　エ　つねに

(3)　被
ア　るは　　イ　しめ　　ウ　ずして　　エ　られ

(4)　苟
ア　いづくんぞ　　イ　いやしくも　　ウ　しかも　　エ　けだし

問二　傍線部(a)が指しているのはどのような人物か。最もふさわしいものを、次のア〜エの中から一つ選びなさい。

ア　軍隊を正しく指揮できる人
イ　使者とするのに適切な人
ウ　天子となるのに適切な人
エ　天子に使者を推薦できる人

問三　傍線部(b)の現代語訳として最もふさわしいものを、次のア〜エの中から一つ選びなさい。

ア　どうしてはやく別れを告げて出発しないのかと
イ　はやく別れを告げて出発しなければならないと
ウ　病気によって辞めるのはどうしてなのかと
エ　どうして病気だと言って辞退しないのかと

問四　傍線部(c)の解釈として最もふさわしいものを、次のア〜エの中から一つ選びなさい。

ア　孔子の教えはすべての者を平等に愛するというものなので
イ　宋の皇帝は広い心で敵にも平等に思いやりを示すので
ウ　元の世祖は敵味方の区別なくすべてのものをいつくしんで
エ　聖人は一目で平等に思いやりのある者を見いだして

問五 傍線部(d)の読み方として最も ふさわしいものを、次のア〜エの中から一つ選びなさい。

ア もつて びくは ふむと いへども ふそくの ふちなり
イ びくを もつてすと いへども ふんで この ふちを はからず
ウ もつて ふそくの ふちを ふむは びくなりと いへども
エ びくを もつて ふそくの ふちを ふむと いへども

問六 本文の内容に合致するものを、次のア〜キの中から二つ選びなさい。

ア 郝経は、難しい役目を与えて自分を窮地に追い込もうとする王文統の意図を承知の上で、あえて使者の役目を引き受けて出発した。
イ 王文統は、郝経と仲がよかったので、難しい役目だと知りつつも、あえて郝経を使者として遣わすことにした。
ウ 廉希憲は、自分が使者として宋に赴こうとしたが、世祖は使者にふさわしくないと考えて行かせなかった。
エ 王文統は、郝経の才徳を認めていなかったので、使者の役目を辞退するように郝経に言ったが、郝経は自分の学問を役立てるよい機会だと言って出発した。
オ 廉希憲は、宋に使者を派遣して戦争をやめて和睦を結び、恩恵と威光を世に明らかにしようと、世祖に進言した。
カ 世祖は、宋に使者を派遣して戦争をやめて和睦を結び、恩恵と威光を世に明らかにしようという廉希憲の進言を採用しなかった。
キ 王文統は、郝経の才徳を認めていたので、大変危険な使者の役目を辞退するように郝経に勧めた。

二 次の文章を読み、あとの設問に答えよ。（ただし、設問の都合で返り点・送り仮名を省いたところがある。）

貞(注1)観初、ⓐ有上書請去佞(注2)臣者。太(注3)宗謂曰、「朕(注4)之所任、皆
以為賢。卿(注5)知佞者誰耶。」対曰、ⓑ「ⓒ臣居草沢、不的知佞
者。請陛下佯怒以試群臣。ⓓ若能不畏ⓔ雷(注6)霆、直言進諫、
則是正人。順情阿旨、則是佞人。」太宗謂封(注7)徳彝曰、「流
水清濁、在其源也。君者政源、人庶(注8)ⓕ猶水。君自為詐、
欲臣下行直、ⓖ是猶源濁而望水清、理不可得。朕常
以魏武帝多詭(注9)詐、深ⓗ鄙其為人。如此、豈可堪為教
令。」謂上書人ⓘ曰、「朕欲使大信行於天下、不欲以詐
道訓俗。卿言ⓙ雖善、朕所不取也。」

（『貞観政要』）

（注）
1 貞観――唐代の年号。
2 佞臣――口先がうまく、こびへつらう家臣。
3 太宗――唐王朝の第二代の君主、李世民。
4 朕――皇帝の自称。
5 卿――第二人称の代名詞。
6 雷霆――かみなり。
7 封徳彝――人名。太宗の家臣。
8 人庶――一般庶民。
9 詭詐――いつわること。あざむくこと。

問一 傍線部ⓐ「有上書請去佞臣者」は、「上書して佞臣を去らんことを請ふ者有り」と読む。返り点をつけよ（送り仮名は不要）。

有 上 書 請 去 佞 臣 者

問二 傍線部ⓑ及び傍線部ⓘの二つの「曰」について、それぞれの主語の組合せとして最も適当なものを、次の中から一つ選べ。

1 ⓑ 太宗 ⓘ 太宗
2 ⓑ 太宗 ⓘ 上書人
3 ⓑ 上書人 ⓘ 太宗
4 ⓑ 上書人 ⓘ 上書人
5 ⓑ 上書人 ⓘ 封徳彝

問三　傍線部ⓒ「臣居㆓草沢㆒、不㆔的知㆓佞者㆒」の意味として最も適当なものを、次の中から一つ選べ。

1　私めは民間におりますが、誰が佞臣か、はっきりとわかっています。
2　私めは民間におりますので、誰が佞臣か、はっきりとはわかりません。
3　私めは民間におりますが、誰が佞臣か、はっきりわからないわけでもありません。
4　私めは民間におりますので、誰が佞臣か、どうしてはっきりわかるでしょうか。
5　私めは民間におりますが、誰が佞臣か、はっきりさせて御覧に入れましょう。

問四　傍線部ⓓ「若能」、傍線部ⓕ「猶㆑水」及び傍線部ⓙ「雖㆑善」の読み方を、それぞれひらがなのみで記せ。仮名遣いは現代仮名遣いでもよい。

ⓓ＝

ⓕ＝

ⓙ＝

問五　傍線部ⓔ「雷霆」は、何をたとえるか。最も適当なものを、次の中から一つ選べ。

1　自然の猛威　　2　敵国の襲来　　3　皇帝の激怒
4　非情な判決　　5　民衆の悲鳴

問六　傍線部ⓖ「是猶源濁而望水清理不可得」を書き下し文にすると、どのようになるか。最も適当なものを、次の中から一つ選べ。

1　是れ猶ほ源濁りて而も水を望まば、清きことの理は得べからざるがごとし。
2　是れ猶ほ源濁りて而も水の清からんことの理を望み、得べからざるがごとし。
3　是れ猶ほ源濁れるがごとく、而も水の清きことは理として得べからざるを望む。
4　是れ猶ほ源濁りて而も水の清からんことを望むがごとく、理として得べからず。
5　是れ猶ほ源のごとく、濁りて而も水の清からんことを望まば、理として得べからず。

問七　傍線部ⓗ「鄙」の意味として最も適当なものを、次の中から一つ選べ。

1　尊敬する　　2　軽蔑する　　3　研究する
4　敬遠する　　5　模倣する

問八　本文の内容と一致するものとして最も適当なものを、次の中から一つ選べ。

1　太宗は意見書を提出した人物の提案に従って群臣を試し、佞臣を発見することができた。
2　太宗は意見書を提出した人物の提案に従ったが、佞臣を発見することはできなかった。
3　太宗は意見書を提出した人物の提案にひどく腹を立て、これを厳しく処罰した。
4　太宗は意見書を提出した人物の提案に従おうとしたが、封徳彝に反対されて思いとどまった。
5　太宗は意見書を提出した人物の提案に従わず、ことさら佞臣を発見しようとはしなかった。

三 次の漢文を読んで、後の設問に答えなさい。ただし、設問との関連で、送り仮名・返り点の一部を省略してあるので注意しなさい。

徽州城外三里、汪朝議家祖父墳庵在焉。紹興間、招僧恵洪住持。僧但飽食安坐、未嘗誦経課念、於供事香火亦極簡略。僅能循循自守、①不為他過、主家上下皆安之。凡歴歳二十、乾道二年病終。汪氏葬之於近山。元有大楮樹、鬱茂扶疏。数月後、頓以枯死、経雨生菌。汪僕牧羊過之、見其肥白光粲、②采而献之主人。用常法煠治、味殊香甘、殆勝於肉。③今夕摘尽、明旦復然、源源不窮、至於三秋。浸浸聞於外、或持銭来、求輟買、悉拒弗与。又畏人盗取、乃設短牆闌護之。隣人嫉憤、夜半踰牆入、将斧其根枿。楮④忽作人言曰、⑤此非爾所得

食、強取之必受殃災。我即⑥昔時庵主也。⑦坐虚受供施、
不知慚愧。身歿之後、冥司罰為菌蕈以償。⑧所以肥美
者、吾精血所化也。今謫数已足、従此去矣。隣人駭而
退、以告汪。⑨汪猶不信、自往験之、不復有 1 、遂伐
以為薪。

（注）○徽州　安徽省の地名。　○朝議　官名。文官の名誉職である朝議大夫の略称。
○墳庵　墓守が住む家。墓所の傍らにある。　○紹興　南宋の年号（一一三一～一一六二）。　○住持　住職。
○誦経課念　経を読み、日課として念仏をとなえる。　○供事香火　線香や灯明をあげる。　○循循　整然としたさま。
○乾道　南宋の年号（一一六五～一一七三）。　○扶疏　木の葉が豊かに茂るさま。　○菌・菌蕈　きのこ。　○僕　召使い。
○肥白光粲　肥えてつやつやしているさま。　○煠治　ゆでて調理する。　○源源　物事が続いて絶えないさま。
○三秋　三度目の秋。　○浸浸　しだいに進むさま。　○輟買　まとめて買う。　○闌護　さえぎってまもる。
○根枿　木の根もとから生えているひこばえ。　○冥司　冥界の役人。　○精血　純粋な血。
○謫数　追放の刑罰を課せられた年数。　○出典は、洪邁『夷堅志』。

問1 ――線部①「不レ為二他過一」（返り点のみ施してある）のここでの意味として最も適当と思われるものを次の中から一つ選びなさい。

ア これというよい働きはしなかった
イ ほかの人を責めるようなことはしなかった
ウ これというしくじりをすることもなかった
エ ほかに頼って行くところもなかった

問2 ――線部②「采而献之主人」（送り仮名・返り点は省略してある）の書き下し文として最も適当と思われるものを次の中から一つ選びなさい。

ア 采（と）りて献（けん）じて主人（しゅじん）に之（ゆ）く
イ 采（と）りて主人（しゅじん）に之（ゆ）きて献（けん）ず
ウ 采（と）りて之（これ）を献（けん）じて主人（しゅじん）とす
エ 采（と）りて之（これ）を主人（しゅじん）に献（けん）ず

問3 ――線部③「今夕摘尽、明旦復然」のここでの意味として最も適当と思われるものを次の中から一つ選びなさい。

ア 夕方に摘みつくしても、翌朝になるとまたもと通りに生えている
イ 夕方に摘みつくしたら、翌朝にはもう何も摘むものはない
ウ 夕方に摘み終わらなかったら、翌朝また続けて摘む
エ 夕方には摘んでもよいが、朝には摘んではいけない

問4　――線部④「忽」のここでの意味として最も適当と思われるものを次の中から一つ選びなさい。

ア　うわのそらで　　　イ　こらえきれず
ウ　いきなり　　　　　エ　うっかりと

問5　――線部⑤「此非爾所得食」（「この茸(きのこ)はおまえごときが食べるべきものではない」という意）に施す返り点として最も適当と思われるものを次の中から一つ選びなさい。

ア　此 非レ爾 所レ得レ食
イ　此 非三爾二所 得 食一
ウ　此 非二爾 所一レ得レ食
エ　此 非二爾 所 得一レ食

問6　――線部⑥「昔時ノ庵主」の指すものとして最も適当と思われるものを次の中から一つ選びなさい。

ア　汪朝議の家の祖父
イ　汪朝議
ウ　汪家の召使い
エ　僧恵洪

問7　――線部⑦「坐虚受供施」（「坐して虚しく供施を受けて」と訓読する）が踏まえる内容として最も適当と思われるものを次の中から一つ選びなさい。

ア　汪家の墓守としてはあまり役に立たないながらも、汪家の人々に愛されたこと。
イ　墓守として長年雇ってもらった汪家で病没し、死後も手厚く葬ってもらったこと。
ウ　ろくに墓守としての務めを果たしもせずに、汪家に雇い続けてもらったこと。
エ　内心不満でありながら、二十年以上も汪家の墓守を務めなくてはならなかったこと。

問8　――線部⑧「所以」（この語を含む句の訓点は省略してある）のここでの意味として最も適当と思われるものを次の中から一つ選びなさい。

ア　理由　　イ　結果　　ウ　説明　　エ　目的

問9　――線部⑨「汪猶不㆑信」（返り点のみ施してある）のここでの意味として最も適当と思われるものを次の中から一つ選びなさい。

ア　汪朝議は隣人の話を信じたくなかった
イ　汪朝議は隣人の話を信じないふりをした
ウ　汪朝議は隣人の話を聞いてもまだ信じなかった
エ　汪朝議は隣人の話を信じていないようだった

問10　［1］に入れるものとして最も適当と思われるものを次の中から一つ選びなさい。

ア　羊　　イ　菌　　ウ　楮　　エ　墳庵

問11　本文の内容と合致するものとして最も適当と思われるものを次の中から一つ選びなさい。

ア　汪家の人々は、病死した僧を寺の許しもなく楮の大木の下に埋葬したことが冥界の役人の怒りを買い、裁きを受ける結果となった。

イ　枯れた楮の大木に生えた茸は、肉の味にも勝るうまさで、そのうえ不老不死の効験があると国中の評判になり、汪家では希望者に快く分け与えた。

ウ　汪家の隣家の人は、人間の言葉で語り始めた楮の大木に驚き、こんな不気味な木をそのままにしては危険だと考え、伐採することを提案した。

エ　枯れた楮の大木に生える茸は、汪家の人々の口に入るためにだけ生えていたのであって、他の家の者が取ったら災いがふりかかるというものであった。

【第三講】

〔模範解答〕

一

問一　(1)　ア　(2)　ウ　(3)　エ　(4)　イ　問二　イ　問三　エ

問四　ウ　問五　エ　問六　ア・オ

二

問一　有下上書請レ去二佞臣一者上　問二　3　問三　2

問四　ⓓ　もしよく　ⓕ　なお〔ほ〕みず〔づ〕のごとし　ⓙ　ぜんなり〔よし〕といえ〔へ〕ども

問五　3　問六　4　問七　2　問八　5

三

問1　ウ　問2　エ　問3　ア　問4　ウ　問5　ウ　問6　エ

問7　ウ　問8　ア　問9　ウ　問10　イ　問11　エ

〔現代語訳〕

一

元の世祖が君主の位についていた。廉希憲は（宋に）使者を遣わして戦争を止め和睦し、自軍に命じて北へ引き上げさせて、恩恵と威光の二つを世に明らかにさせたいと願い出た。世祖はこれをよしとしたが、まだ使者とするのに適切な人を得られないでいた。王文統は以前から郝経の才能と人徳をねたんでいた。そこで郝経を（宋へ）遣わして行かそうとした。ある人が郝

経に言うには、「どうして病気だと言って辞退しないのか」と。郝経が言うには、「南の宋と北の元が戦争してから、揚子江と淮河一帯に取り残された人民は、弱い者は捕らえ略奪され、強い者は原野で死に、戦乱が続いてわざわいが長くなった。主上〔＝元の世祖〕は敵味方の区別なくすべてのものをいつくしんで、両国間の友好を進めようと努めている。（私は）このいやしい身で深さの分からない淵〔＝敵地〕を踏むけれども、もし戦いをやめ乱を平定させ、百万人の人民を戦争の中から救うことができたならば、私が学んだことはむだではなかったことになる」と。とうとう（宋に）行く。

二

貞観の始めごろ、（太宗に）意見書を出して佞臣〔＝口先がうまく、こびへつらう家臣〕を追放することを願う者がいた。太宗が言うことには、「私が任命した臣下たちは、みなすぐれていると思っている。あなたは佞臣が誰であるかわかっているのか」と。（上書人が）お答えして言うには、「私めは民間におりますので、誰が佞臣か、はっきりとはわかりません。どうか陛下、いつわりで怒って、そして群臣を試してください。もし皇帝の激怒をおそれず、はっきりと（陛下を）諫めることができれば、それは正直な臣下です。陛下のお気持ちに合わせてお言葉におもねれば、それは佞臣です」と。太宗が封徳彝に言うことには、「流れていく水が澄むか濁るかは、水源にかかっているのである。主君は政治における水源で、一般庶民はまるで水にたとえられる。主君が自らいつわりを言って、臣下が正直であることを望むのは、ちょうど水源が濁っているのに水が澄むことを望むようなもので、道理として成り立たない。私は常に魏の武帝がいつわりが多いので、深く彼の人品を軽蔑している。このようにしたら、どうして民の強化などできようか、いや、できない」と。（太宗が）上書人に言うことには、「私は信頼が天下において実践されることを望んでいて、いつわりによって民を導こうとは望んでいない。あなたの意見は正しいが、私が採用する方法ではない」と。

三

徽州の街から三里くらいのところに、汪朝議の祖父の墓守が住む家があった。紹興年間、僧の恵洪を住職として招いた。僧〔＝恵洪〕はただお腹一杯食べて何もせず、今まで一度も経を読み、日課として念仏をとなえたことがなく、線香や灯明をあ

げることもきわめて簡略であった。ただ整然と自分の行動に気をつけて、これというしくじりをすることもなく、雇い主の一族のだれもが恵洪に不満を持たなかった。およそ二十年が経過し、乾道二年に（恵洪は）病気で亡くなった。汪氏は恵洪を近くの山に埋葬した。もともと大きな楮の木があり、木の葉がこんもりと豊かに茂っていた。数か月後、急に枯れ、雨が降るときのこが生えてきた。汪朝議の召使いが羊を放牧していてここに立ち寄ると、きのこが肥えてつやつやしているのを見つけ、採ってこれを主人に献上した。通常の方法を用いてゆでて調理すると、味は格別に香りがあって美味しく、肉にも勝るほどであった。夕方に摘みつくしても、翌朝になるとまたもと通りに生えている、このことが続いて絶えず、三度目の秋になった。（このことは）しだいに世間に広まって、ある人はお金を持ってやって来て、（きのこを）まとめて買おうと求めたが、（汪朝議は）すべて拒否して分け与えなかった。また人が盗み取るのを心配し、そこで垣根で囲ってきのこをさえぎってまもった。隣人は嫉妬して憤慨し、夜中に垣根を乗り越えて入り、その木の根もとから生えているひこばえを切ろうとした。楮がいきなり人間の言葉を話して言うことには、「このきのこはおまえごときが食べるべきものではない、無理にこれを採ると必ず災いを受けるであろう。私は以前に庵の主人であった者〔＝僧恵洪〕である。（私は）ろくに墓守としての務めを果たしもせずに、汪家に雇い続けてもらいながら、（そのことを）恥じることがなかった。死んだ後、冥界の役人が罰として（私に）きのこのことならせて償わせている。（きのこが）肥えてつやつやしている理由は、私の純粋な血が変化したものだからだ。今、追放の刑罰を課せられた年数が満了し、ここから去るつもりだ」と。隣人が驚いて家に戻り、汪朝議に告げた。汪朝議は隣人の話を聞いてもまだ信じず、自分自身で行って確かめようとしたが、もう二度ときのこは生えず、とうとう（楮の大木を）切り倒して薪にしてしまった。